

編集後記

『ヴィクトリア朝文化研究』第20号をお届けします。

まずは論集が第20号という節目を迎え、創刊からこのかた優れた学問的成果をコンスタントに世に送り出してきたことを喜ぶとともに、今後の学会のさらなる発展を一会員として祈念いたします。

節目といえば、つい先頃、論集の編集作業もおおむね終了していた9月8日に英国のエリザベス2世が逝去されました。2月には、女王の在位70周年を祝うプラチナジュビリーが華やかに催されたばかりでした。私たちが研究対象としているヴィクトリア時代の終わりがおそらくそうであったように、英国も日本も、そして世界全体がこの70年の間に目まぐるしい変化を遂げ、女王が即位した始まりの時点では想像もつかなかったような地点に来ています。これから歴史家の間で、この長い治世の全体的な総括や再評価が進むことでしょう。女王の治世を一つの時代区分として「エリザベス朝 (Elizabethan)」と呼び、私たちがそうしているように文化研究のカテゴリーとする日が来るのも、そう遠い先のことではないかもしれません。

他方で、衝撃的な出来事が続いて起こり、世界の先行きに不安ばかりが募る一年間でもありました。日本ではコロナ禍が終息したとも言えぬなか、2月にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、今なお出口が見えない状況です。また、国内では7月に安倍元首相が白昼の演説中に銃撃され、死去するという事件が起きました。ここでは政治家としての安倍氏の功罪や事件の背景について論評することは控えますが、世界全体がずるずると「暴力と不信の時代」に引き摺り込まれていくような、べつとりとした不快感を覚えています。しかし、このような時代だからこそ、ヴィクトリア朝の歴史や文化を研究する意義を再検討する必要があるのではないのでしょうか。この論集に収録された2本のエッセイは、その手がかりを与えてくれているのではないかと思います。

研究面に関しては、2年以上に及ぶコロナ禍の影響が大きく広がっていることを実感しています。海外渡航による資料調査ができなかったのは言うに及ばず、国内の大学等の図書館でも長期間にわたって利用制限がかけ

られていました。オンラインによる一次資料や文献へのアクセスが進んでいるのは確かですが、研究環境として大変厳しい状況でした。特に卒業論文を書いている学部生や、学位論文に取り組む大学院生からすると、本来望んでいた研究ができるとは限らず、手近なところで入手できる資料や文献にあわせてテーマを設定せざるをえません。こんな状態が長続きすると、大学で研究を志す学生がますます減り、外国の文化研究という分野じたいが先細りするのではないかという危惧を感じています。

暗い話になってきましたが、このような状況だからこそ、この学会のような研究発表や情報交換の場、そして研究者同士の(学生・教員をまたいだ)ヨコの繋がりがますます大きな意味をもつのではないのでしょうか。今回の論集では、7本の論文の投稿があり、厳正な査読の結果、2本を掲載することができました。残念ながら今回掲載に至らなかった論文もそれぞれに興味深い内容を含んでおり、複数の査読者からのアドバイスを受けて発展していくことを期待しています。

最後に、今号に論文・エッセイを寄稿してくださった執筆者、新たな研究に光をあててくださった書評者、そして忙しいなか編集作業に献身的に関わってくださった編集委員および学会事務局の先生方に深く感謝申し上げます。特に桐山恵子先生には、シンポジウムの論文のみならず、表紙の美しい図版を紹介していただいたことを重ねて感謝いたします。また、持ち込みのようなかたちで今号から新たに印刷をお願いすることになりました大日本法令印刷の大塚様には、幾度もやりとりをしながら丁寧にサポートしていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。皆様ありがとうございました。

(伊藤航多)